夜の旅と昇天

（1/6）：夜の旅

プロローグ

預言者ムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）の、マッカの聖モスクからエルサレムの最も遠きマスジドまでの一夜にしての旅は、神によって与えられた奇跡でした。それは驚異的な夜の幕開けであり、その夜に預言者ムハンマドは昇天し、神との接見を果たしたのです。

> **“かれに栄光あれ。そのしもべを、（マッカの）聖なるマスジド1から、われが周囲を祝福した至遠の（エルサレムの）マスジド2に、夜間、旅をさせた。わが種々の印3をかれ（ムハンマド）に示すためである。本当にかれこそは全聴にして全視であられる。”（クルアーン17：1）**

その旅は形而下の現象であり、これから説明される一連の出来事は、すべて一夜の間に起きたことです。

このシリーズでは、英語の訳語である「モスク」の代わりに原語の「マスジド」を使用します。なぜならマスジドという言葉はムスリムたちが礼拝する建物よりも多くの意味を含むからです。マスジドは「サ・ジャ・ダ」という平伏すことを意味する語根から派生するため、マスジドは平伏す場所を意味します。預言者ムハンマドはこう言っています。「大地は私にとってのマスジドとされたのだ。」4この神による恩寵は、ムハンマドの共同体に対してのみ与えられたものです。

ムスリムは不浄でない場所であれば（一部の例外を除き）、どこでも礼拝することが出来ます。礼拝に特化した建物もありますが、ムス

リムが礼拝する場所は、それがどこであれ逐語的な意味でのマスジド、つまり平伏す場所なのです。平伏す行為は礼拝において最も重んじられている部分です。ムスリムの額が地面に触れるとき、その人物は非常に神に近づきます。礼拝は信仰者とその主との関係を確立し、この夜において一日五回の礼拝が義務付けられたのです。

以下の逸話からは、ムハンマドの人物像、そしてなぜムスリムたちが彼を愛してやまないのかを学ぶことが出来るはずです。また、エルサレムのマスジド・アル＝アクサーがなぜイスラームにおける聖モスクの一つであるのかが分かるでしょう。神はクルアーンの中でエルサレムを「**周囲を祝福した**」土地として言及しています。マスジド・アル＝アクサーの領内の一部であった岩のドームは、最も顕著なエルサレムの象徴でもあり、ムスリム一人一人の心の中で特別な位置を占めています。それがなぜなのかをここから学び取ることが出来るでしょう。それでは7世紀のアラビア半島、マッカの町から夜の旅に出て昇天した預言者ムハンマドに目を向けてみましょう。

旅の始まり

預言者ムハンマドが最初にクルアーンを啓示として下された約10年後、彼は二人の親近者を亡くしました。一人は彼の叔父であり、預言者が孤児だった幼少の頃から彼を愛してやまなかったアブー・ターリブ、そしてその僅か二ヶ月後には預言者の最愛の妻ハディージャが亡くなりました。この年は、「悲しみの年」として知られるようになります。

この年に到るまで、特に預言者ムハンマドを含む新ムスリムたちは迫害を受け、嘲笑や虐待の的でした。彼の叔父の影響力・支持と、ハディージャによる愛情と思いやりは、酷い逆境においても彼に力を与えたのです。しかし、二人がなくなり、彼は悲しみに打ちひしがれ、孤独を感じずにはいられませんでした。

人が本当に神に身を委ねるとき、人生の苦痛や悲しみは信仰における試練となり、それらの試練は常に、やがて安楽をもたらします。慰めの章とも呼ばれるクルアーンの94章において、神は預言者ムハンマドに対し、すべての困難には安楽があることを二度繰り返して強調しつつ保証しています。この非常に困難だった年が過ぎ、預言者ムハンマドには大きな祝福である夜の旅と昇天によって安楽がもたらされました。

“本当に困難と共に、安楽はあり、本当に困難と共に、安楽はある。”（クルアーン94：5–6）

マッカの多神教徒たちによる攻撃を受けるリスクから、それが危険だったにも関わらず、預言者ムハンマドはマッカの聖マスジドで深夜礼拝をしていました。ある夜、彼はカアバ（マスジドの中心に位置する黒い立方体の建物）の近くで横になり、覚醒と睡眠の間の状態にいました。その時、天使が舞い降りてくるなり、彼の胸を首から腹まで切り開きました。天使は預言者ムハンマドの心臓を取り出し、信仰で満たされた金の器に入れられて浄化させた後、元に戻したのです[5]。

天使がムハンマドの胸を切り開き、心臓を取り出したのはこれが初めてではありませんでした。ムハンマドは慣習に従い、幼少期には遊牧民の乳母の元に預けられていました。砂漠の環境はより健康的で、市街地に比べ教育に適していたと見なされていたからです。彼が4〜5歳のときに友達と外で遊んでいると、天使ガブリエルが現れ、ムハンマドの心臓を取り出して、そこから「悪魔の一片」と呼ばれる部分を切除しました。天使ガブリエルはザムザムの水（預言者イシュマエルの時代に湧き出たマッカの湧き水）を用いて心臓を洗い、元の場所に戻しました。他の子供たちはムハンマドが殺されたと思い込み、叫び声を上げて逃げましたが、人々が助けのためにそこに戻ると、彼は一人で怯えて青ざめており、胸にはほんの小さな傷跡しか残っていませんでした[6]。

預言者ムハンマドの使命とは、全人類を唯一なる真実の神への崇拝へと導くことでした。それゆえ、彼の人生のあらゆる側面は、この偉大なる責任へと備えさせるための神による計画の一部だったのです。幼少時代、彼の心臓からは悪魔の一片が取り除かれたため、成人しムスリム国家を建築する際になっても彼の心は清浄かつ純粋な信仰心によって満たされていたのです。こうして、奇跡の夜は始まりました。

預言者ムハンマドには白い動物がもたらされました。彼はアル＝ブラークと呼ばれるその動物を、馬よりは小さく、ロバよりは大きな動物だったと述べています。この動物は、一駆けで見渡すかぎりの遠くまで駆け抜けることが出来たと彼は言っています。つまり、一回の跳躍で途方もない距離を移動することが出来たのです[7]。天使ガブリエルはその動物に乗るよう預言者ムハンマドに告げ、彼らは共に最も遠きマスジドであるマスジド・アル＝アクサーまでの1200㎞以上を旅したのです。

預言者ムハンマドは、地平線を一跨ぎするアル＝ブラークに乗りました。アラビア半島の砂漠を望む夜空には、星が輝いていました。彼は顔にあたる風や、新たに浄化された心臓の鼓動を感じ取っていたことでしょう。この夜の旅の奇跡において、預言者ムハンマドが目にした神のしるしや驚異的な出来事の数々は、私たちの想像を絶するものだったに違いありません。

Footnotes:

1 マッカの聖域にある聖モスク。

2 エルサレムの最も遠きモスク。

3 アラビア語でアーヤといい、証拠、証明、節、教訓などを意味します。

4 サヒーフ・ブハーリー。

5 同上

6 サヒーフ・ムスリム

7 サヒーフ・ブハーリー

（2/6）：マスジド・アル＝アクサー

当時は、預言者ムハンマドにとって困難な時でした。そしてこの旅は彼にとっての大いなる恩寵でした。当時、教えの伝播は新たな段階に差し掛かり、ムスリム国家の設立が始まろうかという頃でした。預言者ムハンマドは目も眩むような気持ちと、孤独感で一杯でした。マッカの民の圧倒的多数は、彼の教えや呼びかけを気に留めず、認めようともしませんでした。彼の敬愛した叔父も、最愛の妻もこの世を去りましたが、夜の旅と昇天という神によるプレゼントは彼にサポートを与え、宇宙の驚異や神の御徴に目を開かせたのです。アル＝ブラークに乗って遥か遠方からエルサレムに到達した預言者ムハンマドは、マスジド・アル＝アクサーとして知られる地域に入りました。彼はアル＝ブラークから降り、それを門に繋ぎ止めました。

もう一つの奇跡

預言者ムハンマドが「平伏しの場」、つまりマスジドに足を踏み入れると、そこでは過去の諸預言者たちに迎えられ、彼は彼らの礼拝を先導するという偉大な栄誉に預かりました。神は預言者に報奨を与え、また過去の預言者も彼同様にその教えの伝播に際して受難していたことを理解させました。預言者たちは預言者ムハンマドの後ろに立ち、彼が彼らの統率者であることを認知しました。このことは彼の重要性と卓越性だけでなく、その教えの性質についても明らかしています。

預言者ムハンマドの出現以前、すべての預言者たちは彼ら自身の民に対してのみ、唯一なる神への服従を説いていました。しかしながら、預言者ムハンマドは全人類に対して遣わされたのであり、神は彼を

「慈悲」として言及しています。神はクルアーンにおいてこう述べます。

> **“かれはあなたがたのため、善いことの聞き手である、かれはアッラーを信仰し、信者たちを信頼する。またあなたがたの中の信仰する者のためには（アッラーからの）慈悲である。”（クルアーン9：61）**

この教えは普遍的であり、これを世界中に広めたのはイスラームだったのです。神の預言者たちは最も新しい、そして最後の預言者の後に立ち、彼が最も必要としているときに手助けをしたのです。預言者ムハンマドの言葉には、すべての預言者たちは兄弟の間柄である、というものがあります[1]。預言者ムハンマドの後ろに立った集まりは、不朽かつ真の同胞性を示すものでした。

アル＝アクサーの重要性

この重要な出来事が、エルサレムで起きた事実についても特筆に値するでしょう。そこは神の預言者たちの土地、つまりアブラハム、イサク、モーゼ、イエスの活躍した土地でした。神はマッカにおけるかれの聖殿とマスジド・アル＝アクサーとの間の繋がりを打ち立てたのです。また神は、いわゆる「宗教の揺りかご」であるエルサレムの聖地と、全人類のためにもたらされたイスラームの誕生の地であるアラビア半島とを繋ぎあわせました。

神はアル＝アクサーを、イスラームにおける三大聖地の一つとして確立させました。マッカの聖マスジド、当時はまだなかったマディーナにおける預言者ムハンマドのマスジド、そしてこの、エルサレムの祝福された土地におけるマスジドです。これら三つのマスジドへのみ、ムスリムは崇拝を意図した旅をすることが認められています[2]。マスジド・アル＝アクサーにおける一度の礼拝は、他の場所でのそれの250回分に相当します（預言者マスジドでは1000回分、マッカの聖マスジドは10万回分）[3]。神はマスジド・アル＝アクサーの重要性と特別性を強調していることから、ムスリムの人生において重要な位置を占めています。それゆえ、そこは熱心に保護され、守られているのです。

アル＝アクサーはイスラームにおける最初のキブラ（ムスリムが礼拝時に向く方向）でしたが、後にマッカの聖マスジドへと変更されました。この変更の正確な日時についてははっきりと分かっていませんが、いくつかの証拠に基づくおおよその時期を推測することは可能です。なぜなら預言者ムハンマドの使命には二つの期間に分けることが出来るからです。それらは人々をイスラームへと招いたマッカ期、そしてムスリム国家を設立したマディーナ期です。預言者ムハンマドと

彼の追従者の大半は、啓示後14年目にマディーナへと移住したのです。

夜の旅と昇天はマッカ期の後期に起き、マッカへのキブラ変更は預言者のマディーナへの移住から15ヶ月目になされました。このことから、神がマッカへとキブラを変更するまで、ムスリムたちはおよそ3年間に渡って礼拝時にアル＝アクサーの方角を向いていたと推論されます。このことはエルサレム、またはマスジド・アル＝アクサーの重要性を貶めるようなことではなく、ただ単に全人類への教えの確立における新たなる段階を象徴しているだけに過ぎないのです。マッカの聖マスジドは、イスラームにおける中心点として固定されています。

奇跡の旅

マスジド・アル＝アクサーの聖域にいる間、天使ガブリエルは預言者ムハンマドに二つの器を差し出しました。その一方にはミルク、もう一方にはワインが入っていました。預言者はミルクを選び、それを飲みました。天使ガブリエルはこう言いました。「あなたをフィトラへとお導きになった神に感謝します。もしあなたがワインを選んだなら、あなたの追従者たちは逸脱したことでしょう。」[4]アラビア語の「フィトラ」を邦訳することは難しいですが、それは人が元来生まれ持った生粋で自然な状態、そして人を正しき行いへと導く内なる感覚を意味します。預言者ムハンマドは本能的に間違ったことや悪いことではなく、正しいことや善いこと、そして地獄への歪んだ道ではなく、真っ直ぐな道を選んだのです。

聖都エルサレムの聖域、マスジド・アル＝アクサー[5]において、預言者ムハンマドは奇跡のさらに次なる段階に進みます。彼は岩から天の一番低い階層に昇天したのです。この岩はエルサレムにおける最も有名な象徴である「岩のドーム」の内部に存在しています。因みによく混同されますが、実際のマスジド・アル＝アクサーの建物はアル＝アクサー地域の反対側の建物です。そこ全域はマスジドではありますが、他にも建物が複数存在しています。岩のドームはそのマスジドの建物の中に位置していますが、それはマスジド・アル＝アクサーではなく、預言者ムハンマドが他の預言者たちを礼拝で先導した場所でもありません。現在、良く知られた金のドームの建物に覆われた岩から預言者ムハンマドは天使ガブリエルを伴い、天の最下層へと昇天したのです。

Footnotes:

1 サヒーフ・ブハーリー。

2 サヒーフ・ブハーリー、サヒーフ・ムスリム。

3 ムスタドラク・アル＝ハーキム。

4 サヒーフ・ブハーリー。

5 その区域はソロモンが建てた神殿に因み、西側諸国において「神殿の丘」としても知られます。

（3/3）：彼は狂人、詩人、あるいは魔術師だったのか

彼は狂人だったのか？

精神病者と接したことのある者は、そういった人々には特定の症状が見て取れることを知っています。ムハンマドはその生涯において、全く狂人特有の症状を示しませんでした。彼の友人、妻、または家族は誰一人として、狂人であることを理由に彼を見捨てはしませんでした。発汗などの啓示の身体的な影響については、啓示の強烈さによるものであり、てんかんの発作、あるいは精神病によるものではありませんでした。

それとは対照的にムハンマドは長期に渡って宣教し、その完全さと複雑さにおいて当時のアラブ社会にとっては全くの未知のものだった法律をもたらしました。もしも預言者が狂人だったのであれば、彼の周囲にいた人々にとって、23年の間のどこかの時点でそれは明らかになったでしょう。歴史上において、一人の狂人が10年間に渡って唯一神への崇拝を呼びかけ、その内の三年間は追従者たちと共に追放され、やがてその地の支配者になったなどということがあったでしょうか？これまで出会った人々の心と魂を勝ち取り、敵からも尊敬されたような狂人が存在したでしょうか？

更に彼に最も近かった教友のアブー・バクルとウマルは、その能力、高潔さ、技量、術策に長けていました。彼らは彼がもたらした宗教において全てを犠牲にする覚悟がありました。ある時アブー・バクルは、自らのあらゆる財産をムハンマド（彼に神の慈悲と祝福あれ）のもとへ持って行き、家族のために何を残したのかを聞かれたところ、こう答えました：‘*私は彼らに神とその使徒を残しました*’。

商業を営んでいたアブー・バクルは、ムハンマドの後に全アラブ人の統治者として選ばれた後、自分自身と家族に対し僅か2ディルハムを費やしただけでした。

一方アブー・バクルの後にアラビア半島の統治者として選ばれたウマルは、シリアとエジプトを支配し、ペルシャとローマの両帝国を征服しました。彼は実直な正義感を持つ男として知られていました。誰

が一体、このような人々が精神的に狂っている人物に従っていたと主張することが出来るでしょうか？

神は次の節において、偏見や先入観を持たないで神の前に立ち、他者と話し合うか、自分自身で熟考しなさいと示唆しています。彼は狂人などではないのです：

> **“言ってやるがいい。「私は忠告する。あなた方はアッラーの御前に、2人ずつまたは1人ずつ立ってよく考えなさい。あなた方の同僚は、気違いではない。彼は厳しい懲罰の（下る）以前に、あなた方に警告するに過ぎない。」”（聖クルアーン　34：46）**

当時のマッカの人々は、部族間の党派心から彼の呼びかけを拒否しながらも、彼ら自身、預言者が狂人であるという言いがかりに確信をもってはいませんでした。今日においても、多くの人々はムハンマドがアラブ人であるという理由によって彼を預言者として認めず、彼は狂人だったのだろう、もしくは悪魔の仲間だったのだろうという根拠もない理由を付けて自己満足をしているに過ぎないのです。神が仰せられているように、彼らのアラブ人に対する憎悪がムハンマドの拒絶につながっているのです：

> **“いや、彼は真理をもたらして、（彼以前の）預言者たち（の啓典）を確証する者である。”（クルアーン 37：37）**

多神教徒のアラブ人たちはムハンマドを熟知していましたが、彼らはムハンマドの宗教が、先祖から伝わる宗教に対する冒涜であると見なしたため、彼に対して狂人であるというレッテルを貼ることにしたのです。

> **“明白なわれの印が、彼らに読誦されても、彼らは言う。「これは一人の男が、あなた方の祖先の崇拝していた神々から背かせようとするのである。」また言う。「これはただ捏造した、作りごとである。」また真理を信じない者たちは、それが彼らに現われると、「これは明らかに魔術に過ぎない。」と言う。われは（前もって）、彼らの学び得る啓典を下していた訳ではない。またあなた以前に、どんな警告者もかれらに遣わさなかった。彼ら以前の者も（真理）を嘘であるとした。われが昔の人々に与えたものは（マッカの人々にとっては）十分の一にも達しない程（優遇）したのに、われの預言者を嘘つき呼ばわりした。わが怒りは何と激しかったことか。**

彼は詩人だったのか？

神は、彼らの言いがかりをクルアーンにおいて触れられ、受け答えられています：

> **“また彼らは、「ただの詩人だ。彼の運勢が逆転するのを待とう」と言う。言ってやるがいい。「待っているがいい。私もあなた方と共に待っていよう。」一体彼らの乏しい理解力がこう命じたのか、それとも彼らは法外な民なのか。または、「彼（ムハンマド）がこれを偽作したのである。」と言うのか。いや、彼らは信じてはいないのである。”（クルアーン 52：30–33）**

神は預言者と詩人を比較して、当時の詩人についてこう描写しています：

> **“また詩人たちのことだが、（悪魔に）そそのかされた者たち（だけ）が、彼らに従う。あなたは、彼らが全ての谷間をさまよい歩く[1] のを見なかったのか。また彼らは、自分の行いもしないことを口にするではないか。信仰して善行に勤しむ者、またアッラーを多く唱念し、迫害された後には自らを守る者は別である。不義を行った者たちは、どんな変り方で、移り変っていくかを、やがて知ることになろう。”（クルアーン 26：224–227）**

正しい品行、神への奉仕、貧者の救済などへ招いた預言者とは反対に、酒、女道楽、戦争、余暇について語っていたアラブ詩人は真理から最も遠ざかっていました。今日の詩人や哲学者とは違い、ムハンマドは誰よりも先に自らの教えを実践していたのです。

預言者が朗誦したクルアーンは、その性質においていかなる詩とも異なります。当時のアラブ人たちは詩の中の韻律、押韻、音節や節の語尾において厳格な規則を適用していました。クルアーンは当時知られていた規則のどれにも従わず、同時にアラブ人が知っていたあらゆる種類の詩文を上回っていたのです。彼らの一部はクルアーンのわずか数節を聞いただけで、彼らの持つ知識から、それらのような美しいものの源泉が創造物から来るはずがないことを悟り、直ちにムスリムになったのです。

ムハンマドは、イスラーム以前、そして預言者としての使命を受けた後も、詩を書いたことは一度もなかったことで知られています。実際、預言者はそれらをひどく嫌っていました。彼の言行録であるスンナは、これまで手厚く保管され、クルアーンとは文学的に全くその内

容と趣きを異にします。アラビア詩の倉庫にムハンマドによる作品は一つもないのです。

彼は魔術師だったのか？

預言者ムハンマドは一度も魔術を学んだり、実践したりしたことがありませんでした。反対に彼は魔術の実践者を非難し、彼の追従者たちに対してそれに対する保護を教えたのです。

魔術師たちには、悪魔との強い関係があります。彼らの組み合わせは人々を欺くことを可能にさせます。悪魔の目的は虚偽、罪、卑猥、不道徳、悪の普及、そして家族の破壊なのです。クルアーンは悪魔に取り憑かれた人々を明確にします：

> **“われは、悪魔たちが誰の上に下るのかあなた方に告げようか。彼らは、全ての嘘付きの徒の上に下る。（悪魔の話に）耳を貸す（者）の多くは嘘付きの徒である。”（クルアーン 26：221–223）**

預言者ムハンマドは、一度も嘘をついたことのない、謹厳実直な者として広く認知されていました。彼は人々に品行方正であるよう命じました。世界史において、クルアーンのような啓典、またはムハンマドのような法をもたらした魔術師は存在しません。

Footnotes:

1 多くの注釈者たちが指摘しているように、この慣用表現は、混乱や目的のなさ、または自己矛盾を表す際に用いられます。この文脈では、あらゆる矛盾を超越しているクルアーンの正確さと、詩特有の曖昧さとの比較として強調されています。、□

（4/6）：第七天

天使ガブリエルと預言者ムハンマドは諸天の中で、奇跡の昇天を続けました。この旅は、いかなる人間の想像の範疇をも遥かに超えたものです。それはアラビア半島の砂漠地帯から始まり、既知宇宙を超越するものでした。第七天の門では、それまでと同じやりとりが繰り返され、天使たちは預言者ムハンマドとの対面を喜びました。入門の許可が下り、神の啓示を委託された天使ガブリエルを伴い、預言者は最終天に入ったのです。

第七天はキリスト教徒の使う慣用語「私は第七天にいる」という言葉からも分かるように、最高の喜びや至福の表現として使われます。

イスラームにおいて、第七天は預言者ムハンマドと預言者アブラハムが出会った場所であり、実際彼（ムハンマド）は、こうした奇跡の旅という栄誉を与えられ最高の喜びと至福を感じていたはずでしょう。二人の預言者はお互いに挨拶の言葉「アッサラーム・アライクム」を交わし、他の預言者たちと同様、預言者アブラハムも預言者ムハンマドの使命における確信を表明したのです。

アブラハムは息子イシュマエルを通したアラブ人の父祖であり、預言者ムハンマドの祖先です。彼は息子イサクを通し、イスラエルの民（預言者モーゼの追従者）となった人々の祖先でもあります。ユダヤ教の伝統において、アブラハムはユダヤ人の父祖とも呼ばれます。しかし、クルアーンでは彼がユダヤ教徒でもキリスト教徒でもなかったと明記されていることから、イスラームではそうした観念を否定し、彼は純粋な一神教の信仰者であったとします。

> **“…何故あなたがたは、イブラーヒームのことで論争するのか。律法と福音とは、かれ以後に下されたのではないか。あなたがたは理解しないのか…イブラーヒームはユダヤ教徒でもキリスト教徒でもなかった。しかしかれは純正なムスリム、ハニーファ1であり、多神教徒の仲間ではなかったのである。”（クルアーン3：65，67）**

ムスリムはすべての預言者たちを信じることが求められます。アブラハムは神の諸使徒の中でも特に重要な存在として、イスラームとキリスト教2双方の伝統において「寵愛を受けた神の僕」と呼ばれる特別な地位を有しています。アブラハムは息子のイシュマエルと共にカアバ（マッカの聖マスジド中央に位置する、黒い立方体の建物）を建築したのです。

> **“それからイブラーヒームとイスマーイールが、その家の礎を定めた時のこと。（その時二人は言った。）「主よ、わたしたちから（この奉仕を）受け入れて下さい。本当にあなたは全聴にして全知であられる。”（クルアーン2：127）**

ムスリムは毎日の礼拝において、カアバ聖殿の方角に顔を向けて神へ祈り、アブラハムと彼の家族に祝福があるよう祈願しています。

天使の世界

預言者ムハンマドは第七天において、「アル＝バイト・アル＝マアムール（不断に詣でられる聖殿）」と呼ばれる建物を見せられました。預言者アブラハムがその聖殿と共にその場にいたことは相応しいことなのでしょう。なぜなら、それは天におけるマッカのカアバ聖殿に

相当するものであるからです。毎年の巡礼期には、預言者アブラハムの例に従い、カアバ周回を含む種々の儀礼を行うため、200万人以上ものムスリムたちが世界中からマッカに押し寄せます。第七天における「不断に詣でられる聖殿」では、毎日7万の天使たちが訪れ、神を崇拝しているのです。預言者ムハンマドによると、天使は一度バイト・アル＝マアムールを訪れると、二度と訪れることはないといいます。神はクルアーンにおいて、この聖殿において誓っています。

“不断に詣でられる聖殿にかけて”（クルアーン52：4）

毎日、7万もの天使が訪れているということは、一体何を示唆しているのでしょうか？
一体それは何千年、いや何億年と続いているのでしょうか？
神によって光から創造されたそれらの天使たちの数は、どれ位なのでしょう？
このような奇跡を目撃し、それを私たちに説明したことは、預言者ムハンマドに与えられたもう一つの栄誉だったのです。この伝承において彼が私たちに伝えていることとして、諸天はうなりを上げており、またあらゆる空間はたとえそれが指四本分の空間であれ、天使一人によって神の崇拝のため占められていると述べられています。

最上界

預言者ムハンマドは、「スィドラ・アル＝ムンタハー」と呼ばれる木のそびえる最上界に到達します。

“（誰も越せない）涯にある、スィドラ木の傍で。そのそばに終の住まいの楽園がある。”（クルアーン53：14–15）

彼はその果実は壺のようで、その葉は象の耳程の大きさであったと言い、四つの川がスィドラの木の根本を源流としていると述べています。預言者ムハンマドがそれらのことについて尋ねると、川の二つは楽園が源流であると答えられています。昇天の伝承の中でも、これら二つの川の名前や意義についてのものは残されていません。しかしながら彼は、残りの二つの川は人間の世界において特に祝福されているナイル川とユーフラテス川の複製であると告げられています。

スィドラ・アル＝ムンタハーが最上界であると呼ばれるのは、地上または諸天から昇ってくる全てのものはそこで止まり、降りてくる全てのものもそこで止まる[3]からであり、また諸天使の知識もその地点で止まるからです。預言者ムハンマド以外には、その更なる上へと到達したことはないのです[4]。そこから先は諸天を超え、楽園や地獄、神の玉座を含む、来世の世界となります。預言者ムハンマドはその奇跡の

旅を続け、その世界に入り、全能なる神の御前に立つことになるのです。

Footnotes:

1
ムスリムという言葉は神のみへ服従する者を指し、ハニーファという言葉は純粋・真実・誠実さを意味します。アラビア語辞典ではハニーファの意味として「正統」という言葉を記しますが、実際には正統よりも多くの意味があります。それは教わることのない正統性であり、本能的・自然的な真の性質を表すのです。

2 イザヤ書４１：８＆２

3 サヒーフ・ムスリム

4 イマーム・アン＝ナワウィー

諸天の最上層であるスィドラの木をさらに超えると、それまで人間が立ち入ったことのなかった境界となります。夜の旅と諸天をとおしての昇天は、預言者ムハンマドが最上層を超え、神の御前に立つことによってピークに達しました。スィドラの木を超えると、来世、楽園、そして神の玉座と神その御方が存在する世界なのです。

「奇跡的」という言葉では、預言者ムハンマドに起きたことを説明するには事足りないものでしょう。それは想像はおろか、いかなる説明をもってしても実感することは出来ないものです。預言者ムハンマドは彼自身の目で神を見たわけではありませんでした。神はクルアーンの中でこう述べます。

> **“視覚ではかれを捉えることはできない。”（クルアーン6：103）**

教友の一人が、預言者ムハンマドが神を直接見たのかについて尋ねると、彼はこう答えています。

“光の幕がかけられているかれを見ることなど出来ようか。”（サヒーフ・ムスリム）

しかしながら、神の預言者であるムハンマドが神の御前に立ったという事実に変わりはないのです。

礼拝の重要性

神は預言者ムハンマドに語りかけましたが、私たちにはその詳細については、神が預言者ムハンマドとその追従者たちに一日五回の礼拝を命じたこと以外、何も知らされていません。このことから、私たち

は礼拝の重要性を直ちに理解することが出来ます。それは天において神が命じた唯一の命令であり、その他すべての命令は、地上において下されたものであるからです。礼拝とは、神の唯一性を信じる者たちへの神による贈り物なのです。神はこの贈り物をムハンマドに授け、彼はそれをイスラームの追従者へと伝えたのです。それは大いなる祝福と恩寵に満ちた贈り物でした。それは神と私たちとの架け橋を築き上げ、維持させるものです。神は私たちの祈りを必要とはしませんが、人間として無力な存在の私たちは神とのつながりを大いに必要としているのです。事実、一日五回の義務の礼拝はアラビア語で「つながり」を意味する語根を持つ「サラー」なのです。

“各礼拝を、特に中間の礼拝を謹厳に守れ、敬虔にアッラーの御前に立て。”（クルアーン2：238）

神は預言者ムハンマドとその追従者に一日五十回の礼拝を命じました。預言者ムハンマドが天から降りる時、彼が預言者モーゼの前を通りかかったため、彼は何が課せられたのかを尋ねました。預言者ムハンマドが一日五十回の礼拝について告げると、驚いたモーゼは即座にこう言いました。「あなたの主の元に戻り、減らしてくれるよう頼みなさい。」神が五十回の礼拝を命じたとき、預言者ムハンマドはそれを受け入れましたが、自身も偉大なる預言者であったモーゼは自らの体験から、いかに人々が宗教的義務の履行について反応するかを熟知していたのです。彼は、預言者ムハンマドの追従者たちがそれ程までに多くの礼拝をすることが出来ないであろうことを確信していました。預言者ムハンマドには知識がありましたが、預言者モーゼにはより多くの経験があったのです。

預言者ムハンマドは長兄の助言を聞き入れ、神の御前に戻り、軽減を求めました。神はそれを十回分減らし、四十回とされました。預言者ムハンマドが降りると、預言者モーゼは何が起きたか尋ねました。減らされたのが十回だけだったと知った彼は、更なる軽減を求めるよう促しました。

義務の礼拝が五回になるまで、このやりとりが繰り返された後、預言者モーゼはこう言ってさらなる軽減を求めるよう促しました。「ムハンマドよ、私は人々のことを知っている。あなたの共同体はそれに耐えることが出来ないだろうから、再び戻ってあなたの人々の重荷が軽減されるよう求めるのだ。」預言者ムハンマドは答えました。「いいえ。」彼はさらなる軽減を求めることに恥じらいを感じ、五回の礼拝で満足していると言いました。するとどこからか声が響き渡りました。「礼拝は五回まで軽減されたが、その報奨には五十回分が与えられるだろう。」これら五回の礼拝でさえ、一部の人々にとっては困難

であったとしても、「つながり」を確立し、やがて主との面会を信じる人々にとっては容易であることを神は明確にされたのです。

> **“忍耐と礼拝によって、（アッラーの）御助けを請い願いなさい。だがそれは、（主を畏れる）謙虚な者でなければ本当に難かしいこと。敬神の仲間はやがて主に会うこと、かれの御許に帰り行くことを堅く心に銘記している者である。”（クルアーン2：45–46）**

慈悲、愛情、思いやり

この奇跡の夜は、こうした神の慈悲によって終りを迎えました。一日に五十回もの礼拝をすることの困難さを想像してみてください。預言者ムハンマドの追従者たちの方が審判の日により数が多いことを知って預言者モーゼが涙したことを私たちは知りましたが、ここで彼による預言者ムハンマドへの誠実な助言と共に、信仰者によるイスラーム実践が容易なものとなるよう願う彼の姿勢もこの旅によって私たちは知ることが出来ます。預言者間のライバル心は愛情と思いやりに満ちたものであり、ここからも私たちはどうお互いを接するかについて学び取ることが出来ます。神は善行と公正さにおいて信仰者間で競い合うよう告げられますが、私たちはこれを容易に行うことの出来るよう推奨し合うべきなのです。

> **“…だから互いに競って善行に励め。あなたがたは挙って、アッラーに帰るのである。その時かれは、あなたがたが論争していたことに就いて、告げられる。”（クルアーン5：48）**

その後、預言者ムハンマドはマッカの聖マスジドへと降りていきました。そして預言者の教友たちは、信仰における最も大きな試練を受けることになります。神の預言者であるムハンマドは、通常一ヶ月以上を要するエルサレムの最も遠きマスジドへの旅から一夜にして帰還したことを公言したのです。また彼は、諸天へと昇天し、人間が踏み入れたことのなかった領域に入り、神の御前に立ったことも明らかにしました。これはまさしく奇跡の旅でしたが、それについて彼の教友たち、また敵たちはどのような反応を示したのでしょうか？

預言者ムハンマドは、アル＝ブラークに跨ってエルサレムの最も遠きマスジドまで飛び立ちました。彼は昇天して七天を超え、想像もつかないような奇跡を体験しました。彼は諸預言者と顔を合わせて挨拶を交わし、ついには神の御前に立ったのです。同じ夜、旅立ちから僅か数時間後には、彼はマッカに戻っていました。

この奇跡の旅は、預言者ムハンマドの敵にとって、彼とその追従者たちに対する格好の武器となり、同様に信仰者たちの信仰を試す試練となりました。彼は帰還すると、ウンム・アイマンのもとへ向かい、奇跡の旅について述べました。彼女の反応はこうでした。「神の使徒よ、このことは誰にも言ってはなりません。」ウンム・アイマンの預言者ムハンマドへの信頼は完全なものだったため、彼女はこの旅について信じましたが、他の人々がどう反応するかを恐れたのです。

預言者ムハンマドはウンム・アイマンについて、「私の母のような存在」であると述べています。彼女は彼の実母アーミナの忠実な女中で、彼女の死後も彼と留まりました。預言者ムハンマドとウンム・アイマンは常に懇意にしており、この奇跡の旅の後、彼はおそらく安息を求めてウンム・アイマンの家を訪れ、一連の奇跡について、そして次の動きについて考えていたのです。

預言者ムハンマドは、奇跡の夜について人々に打ち明けることを決心しました。彼はその反応や帰結がどうなろうと、神のメッセージを人々に伝える責任を感じていました。彼の神への信頼は不動のものでした。彼は厳かに家を出て、聖マスジドへ向かいました。その途中、彼は何人かと出会い、夜の旅についての知らせが人々の間に広まって行きました。

反応

預言者ムハンマドがマスジドで静かに座っていると、アブー・ジャハルが近づいてきて、無頓着にこう言いました。「ムハンマドよ、何か新しいことはないか？」イスラームの最大の敵の一人と見られていたアブー・ジャハルは、イスラーム初期におけるムスリムたちへの拷問、虐待、殺人、嫌がらせの数々を行なってきた張本人でした。預言者ムハンマドはアブー・ジャハルによる悪意と憎悪について承知していましたが、彼は正直にこう言いました。「昨夜、私はエルサレムへと旅をし、戻ってきたところだ。」

笑いを堪え切れなかったアブー・ジャハルは、マッカの人々の前で同じことを言うよう求めました。預言者ムハンマドがそれに応じると、アブー・ジャハルは駆け足でマスジドを飛び出し、走りながら道端の人々に呼びかけていきました。マスジドに十分な数の人々が集まってくると、アブー・ジャハルに促され、預言者ムハンマドは皆に聞こえるようこう言いました。「私はエルサレムへ行って戻ってきた。」

人々の群衆は笑い出し、口笛を吹き、手を叩き合わせました。彼らはそれを壮大な冗談だと捉え、地面を笑い転げたのです。これはアブー・ジャハルのもくろみ通りに行き、彼をわくわくさせました。不信仰者の群衆はイスラームに止めを刺すことが出来る機会だと思ったのです。彼らは預言者ムハンマドの主張に嘲笑し、

貶しました。群衆の中にはエルサレムへと旅行したことがある者がいたため、彼らは預言者ムハンマドが見たものを説明するよう求めました。

預言者は彼の旅について説明を始めましたが、それは彼を苛立たせました。彼がエルサレムで過ごした時間は僅かで、奇跡の旅そのもの以外のことは僅かな詳細しか覚えていなかったからです。しかしながら、預言者ムハンマドは神が「彼の目の前」に詳細を示し、彼が見た「石から石、レンガからレンガ」について説明しました。エルサレムに旅した者たちは彼の語った詳細が正確であると証言したのです。（サヒーフ・ブハーリー）

また他の伝承によれば、彼がマッカへと戻ってくる際、預言者ムハンマドはキャラバンの上を通り越したと述べています。彼はそれについての詳細を明確に述べました。キャラバンはラクダを見失っていたため、預言者ムハンマドは空からラクダがどこに居るかを彼らに告げたのです。彼はまた、彼らの水を飲んでいます。

マッカの人々はそのキャラバンが戻ってくる前に、直ちに昨夜の出来事について尋ねる使者を遣わしました。彼らは、ラクダの居場所を告げる奇妙な声が聞こえてきたこと、そしてその場にあった水が消えたことを確証しました。しかしこれらの証言さえも人々にとっては事足りないものでした。彼らは預言者の言葉を信じず、愚弄し嘲笑したのです。この奇跡の旅は、一部の新ムスリムでさえ不信仰に陥り、イスラーム信仰から背き去ることになる試練だったのです。

信仰の甘美さ

強く、真の信仰を持つ人々にとっては、神の御力は明らかでした。その話のすべてを信じ難いと受け取った人々は、預言者ムハンマドの最も良き友であり支持者でもあるアブー・バクルのもとを訪れました。彼らは預言者ムハンマドのエルサレムへの一夜にしての旅について彼が信じているかどうかを尋ねました。アブー・バクルは躊躇することなく、こう断言しました。「神の使徒がそう言ったのであれば、それは事実だ。」この出来事から、アブー・バクルは「アッ・スィッディーク（信仰者のさきがけ）」という敬称を得たのです。このことは、不信仰者たちによる身体的拷問や虐待を受け、さらにはこうした想像もつかないような概念を提示され、それを受け入れなければならなかったムスリムたちにとっての転機点でした。彼らの一部は失敗者となりましたが、多くは新たなる高みに到達し、唯一なる神への真の服従による信仰の甘美さを味わうことができたのです。

マッカの聖マスジドからエルサレムの最も遠きマスジドまでの一夜にしての旅と、諸天における昇天から全能なる神の御前に立ったことは、最後の預言者であるムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）以外のい

かなる人間もそれまで授けられたことのなかった奇跡、そして大いなる栄誉だったのです。